

# 海のほとり

芥川龍之介

青空文庫



……雨はまだ降りつづけていた。僕等は午飯をすませた後、敷島を何本も灰にしな  
がら、東京の友だちの噂などした。

僕等のいるのは何もない庭へ葭簾の日除けを差しかけた六畳二間の離れだった。庭には  
何もないと言つても、この海辺に多い弘法麦だけは疎らに砂の上に穂を垂れていた。そ  
の穂は僕等の来た時にはまだすつかり出揃わなかつた。出ているのもたいていはまつ青だ  
つた。が、今はいつのまにかどの穂も同じように狐色に変わり、穂先ごとに滴をやどし  
ていた。

「さあ、仕事でもするかな。」

Mは長ながと寝ころんだまま、糊の強い宿の湯帷子の袖に近眼鏡の玉を拭っていた。  
仕事と言うのは僕等の雑誌へ毎月何か書かなければならぬ、その創作のことを指すのだつ  
た。

Mの次の間へ引きとつた後、僕は座蒲団を枕にしなから、里見八犬伝を読みはじめた。

きのう僕の読みかけたのは信乃、現八、小文吾などの莊助を救いに出かけるところだった。「その時蟹崎照文は懐ろより用意の沙金を五包みとり出しつ。先ず三包みを扇にのせたるそがままに、……三犬士、この金は三十兩をひと包みとせり。もつとも些少の東西なれども、こたびの路用を資くるのみ。わが私の餓別ならず、里見殿の賜ものなるに、辞わで納め給えと言う。」——僕はそこを読みながら、おととい届いた原稿料の一枚四十銭だったのを思い出した。僕等は二人ともこの七月に大学の英文科を卒業していた。従つて衣食の計を立てることは僕等の目前に迫っていた。僕はだんだん八犬伝を忘れ、教師になることなどを考え出した。が、そのうちに眠つたと見え、いつかこう言う短い夢を見ていた。

——それは何でも夜更けらしかった。僕はとにかく兩戸をしめた座敷にたつた一人横になつていた。すると誰か戸を叩いて「もし、もし」と僕に声をかけた。僕はその兩戸の向うに池のあることを承知していた。しかし僕に声をかけたのは誰だか少しもわからなかつた。

「もし、もし、お願いがあるのですが、……」

兩戸の外の声はこう言った。僕はその言葉を聞いた時、「ははあ、Kのやつだな」と思

った。Kと言うのは僕等よりも一年後の哲学科にいた、箸にも棒にもかからぬ男だった。僕は横になったまま、かなり大声に返事をした。

「哀れっほい声を出したって駄目だよ。また君、金のことだろう？」

「いいえ、金のことじゃありません。ただわたしの友だちに会わせたい女があるんですが、……」

その声はどうもKらしくなかった。のみならず誰か僕のことを心配してくれる人らしかった。僕は急にわくわくしながら、雨戸をあけに飛び起きて行った。実際庭は縁先からずっと広い池になっていた。けれどもそこにはKは勿論、誰も人かげは見えなかった。

僕はしばらく月の映った池の上を眺めていた。池は海草の流れているのを見ると、潮入りになっていりしかなかった。そのうちに僕はすぐ目の前にさぎ波のきらきら立っているのを見つけた。さぎ波は足もとへ寄つて来るにつれ、だんだん一匹の鮎になった。鮎は水の澄んだ中に悠々と尾鰭を動かしていた。

「ああ、鮎が声をかけたんだ。」

僕はこう思つて安心した。――

僕の目を覚ました時にはもう軒先の葭簾の日除けは薄日の光を透かしていた。僕は洗

面器を持つて庭へ下り、裏の井戸いどばたへ顔を洗いに行つた。しかし顔を洗つた後あとでも、今しがた見た夢の記憶は妙に僕にこびりついていた。「つまりあの夢の中の鮒しきいきかは識域下の我われと云うやつなんだ。」——そんな気も多少はしたのだった。

## 二

……一時間ばかりたつた後のち、手拭てぬぐいを頭に巻きつけた僕等は海水帽かしげたに貸下駄かしたを突っかけ、半町ほどある海へ泳およぎに行つた。道は庭先をだらだら下りると、すぐに浜へつづいていた。

「泳げるかな？」

「きようは少し寒いかも知れない。」

僕等は弘法麦こうぼうむぎの茂みを避け避け、(滴しずくをためた弘法麦の中へうっかり足を踏み入れると、ふくら脛はざの痒かゆくなるのに閉口したから。)そんなことを話して歩いて行つた。気候は海へはいるには涼し過ぎるのに違いなかつた。けれども僕等は上総かずさの海に、——と云うよりもむしろ暮れかかつた夏なつに未練みれんを持つていたのだった。

海には僕等の来た頃は勿論もちろん、きのうさえまだ七八人の男女なんによは浪乗りなみのなどを試みてい

た。しかしきようは人かげもなければ、海水浴区域を指定する赤旗も立っていないかった。ただ広びろとつづいた渚なぎさに浪の倒れているばかりだった。葭簾よしず囲いの着もの脱ぎ場にも、——そこには茶色の犬が一匹、細かい羽虫はむしの群れむを追いかけていた。が、それも僕等を見ると、すぐに向うへ逃げて行ってしまった。

僕は下駄だけは脱いだものの、とうてい泳ぐ気にはなれなかった。しかしMはいつのまにか湯帷子ゆかたや眼鏡めがねを着もの脱ぎ場へ置き、海水帽の上へ頬ほおかぶりをしながら、ざぶざぶ浅瀬あせへはいって行った。

「おい、はいる気かい？」

「だつてせつかく来たんじゃないか？」

Mは膝ほどある水の中に幾分いくぶんか腰をかがめたなり、日に焼けた笑顔わらいがおをふり向けて見せた。

「君もはいれよ。」

「僕は厭いやだ。」

「へん、『嫣然えんぜん』がいりやはいるだろう。」

「莫迦ぼかを言え。」

「嫣然」と言うのはここにいるうちに挨拶ぐらいはし合うようになったある十五六の中  
学生だった。彼は格別美少年ではなかった。しかしどこか若木に似た水々しさを具えた少  
年だった。ちようど十日ばかり以前のある午後、僕等は海から上った体を熱い砂の上へ投  
げ出していた。そこへ彼も潮に濡れたなり、すたすた板子を引きずって来た。が、ふと彼  
の足もとに僕等の転がっているのを見ると、鮮かに歯を見せて一笑した。Mは彼の通り過  
ぎた後、ちよつと僕に微笑を送り、

「あいつ、嫣然として笑ったな。」と言った。それ以来彼は僕等の間に「嫣然」と言う  
名を得ていたのだった。

「どうしてもはいらないか？」

「どうしてもはいらない。」

「イゴイストめ！」

Mは体を濡らし濡らし、ずんずん沖へ進みはじめた。僕はMには頓着せず、着もの  
脱ぎ場から少し離れた、小高い砂山の上へ行った。それから貸下駄を臀の下に敷き、敷  
島でも一本吸おうとした。しかし僕のマッチの火は存外強い風のために容易に巻煙草に  
移らなかつた。



「おうい。」

Mはいつ引つ返したのか、向うの浅瀬に佇んだまま、何か僕に声をかけていた。けれども生憎その声も絶え間のない浪の音のためにはつきり僕の耳へはいらなかった。

「どうしたんだ？」

僕のこう尋ねた時にはMはもう湯帷子を引っかけ、僕の隣に腰を下ろしていた。

「何、水母にやられたんだ。」

海にはこの数日来、俄に水母が殖えたらしかつた。現に僕もおとといの朝、左の肩から上膊へかけてずっと針の痕をつけられていた。

「どこを？」

「頸のまわりを。やられたなと思つてまわりを見ると、何匹も水の中に浮いているんだ。」

「だから僕はいらなかったんだ。」

「嘘をつけ。——だがもう海水浴もおしまいだな。」

渚はどこも見渡す限り、打ち上げられた海草のほかは白じらと日の光に煙っていた。

そこにはただ雲の影の時々大走りに通るだけだった。僕等は敷島を啣えながら、しばらくは黙つてこう言う渚に寄せて来る浪を眺めていた。

「君は教師の口はきまつたのか？」

Mは唐突いきなりとこんなことを尋ねた。

「まだだ。君は？」

「僕か？ 僕は……」

Mの何か言いかけた時、僕等は急に笑い声やけたたましい足音に驚かされた。それは海水着に海水帽をかぶった同年輩どうねんばいの二人の少女ふたりだった。彼等はほとんど傍若無人ぼうじゃくぶじんに僕等の側を通り抜けながら、まっすぐに渚へ走って行った。僕等はその後姿うしろすがたを、——ひとり人は真紅しんくの海水着を着、もう一人はちようど虎とらのように黒と黄とだんだらの海水着を着た、軽快な後姿を見送ると、いつか言い合せたように微笑していた。

「彼女たちもまだ帰らなかつたんだな。」

Mの声は常談じょうだんらしい中にも多少の感慨たたくを託していた。

「どうだ、もう一ぺんはいつて来ちや？」

「あいつ一人ならばはいつて来るがな。何しろ『ジンゲジ』も一しよじや、……」

僕等は前の「媽然えんぜん」のように彼等の一人に、——黒と黄との海水着を着た少女に「ジンゲジ」と言う譚名あだなをつけていた。「ジンゲジ」とは彼女の顔だち（ゲジヒト）の肉感的

(ジンリツヒ)なことを意味するのだった。僕等は二人ともこの少女にどうも好意を持ち悪にくかった。もう一人の少女にも、——Mはもう一人の少女には比較的興味を感じていた。のみならず「君は『ジンゲジ』にしろよ。僕はあいつにするから」などと都合つごうの好いことを主張していた。

「そこを彼女のためにはいつて来いよ。」

「ふん、犠ぎせ牲せ的精神せいしんを發揮はつぱいしてか?——だがあいつも見られていることはちゃんと意識いしきしているんだからな。」

「意識いしきしていたって好いじやないか。」

「いや、どうも少し癩しやくだね。」

彼等は手をつないだまま、もう浅瀬へはいつていた。浪なみは彼等の足もとへ絶えず水吹しぶきを打ち上げに来た。彼等は濡れるのを惧おそれるようにそのたびにきつと飛び上った。こう言う彼等の戯たわむれはこの寂しい残暑の渚と不調和に感ずるほど花やかに見えた。それは実際人間よりも蝶ちょうの美しさに近いものだった。僕等は風の運んで来る彼等の笑い声を聞きながら、しばらくまた渚から遠ざかる彼等の姿を眺めていた。

「感心かんしんに中々勇敢ゆうかんだな。」

「まだ背は立っている。」

「もう——いや、まだ立っているな。」

彼等はどうに手をつなはず、別々に沖へ進んでいた。彼等の一人は、——真紅の海水着を着た少女は特にずんずん進んでいた。と思うと乳ほどの水の中に立ち、もう一人の少女を招きながら、何か甲高い声をあげた。その顔は大きい海水帽のうちに遠目にも活き活きと笑っていた。

「水母かな？」

「水母かも知れない。」

しかし彼等は前後したまま、さらに沖へ出て行くのだった。

僕等は二人の少女の姿が海水帽ばかりになったのを見、やっと砂の上の腰を起した。それから余り話もせず、（腹も減っていたのに違いなかった。）宿の方へぶらぶら帰って行った。

……日の暮も秋のように涼しかった。僕等は晩飯をすませた後、この町に帰省中のHと  
 言う友だちやNさんと言う宿の若主人ともう一度浜へ出かけて行った。それは何も四人と  
 も一しよに散歩をするために出かけたのではなかった。HはS村の伯父を尋ねに、Nさん  
 はまた同じ村の籠屋へ庭鳥を伏せる籠を註文しにそれぞれ足を運んでいたのだった。  
 浜伝いにS村へ出る途は高い砂山の裾をまわり、ちようど海水浴区域とは反対の方角  
 に向つていた。海は勿論砂山に隠れ、浪の音もかすかにしか聞えなかつた。しかし疎らに  
 生え伸びた草は何か黒い穂に出ながら、絶えず潮風にそよいでいた。

「この辺に生えている草は弘法麦じゃないね。——Nさん、これば何と言うの？」

僕は足もとの草をむしり、甚平一つになつたNさんに渡した。

「さあ、蓼じゃなし、——何と言いますかね。Hさんは知っているでしょう。わたしなぞ  
 とは違つて土地つ子ですから。」

僕等もNさんの東京から聳に來たことは耳にしていた。のみならず家附の細君は去年  
 の夏とかに男を拵えて家出したことも耳にしていた。

「魚のこともHさんはわたしよりはずっと詳しいんです。」

「へええ、Hはそんなに学者かね。僕はまた知つているのは劍術ばかりかと思つていた。」

HはMにこう言われても、弓の折れの杖を引きずったまま、ただにやにや笑っていた。

「Mさん、あなたも何かやるでしょう？」

「僕？　僕はまあ泳ぎだけですな。」

Nさんはバットに火をつけた後、のち去年水泳中に虎魚おこぜに刺さされた東京の株屋の話をした。その株屋は誰が何と言っても、いや、虎魚おこぜなどの刺す訣わけはない、確かにあれは海蛇うみへびだと強情を張っていたとか言うことだった。

「海蛇なんてほんとうにいるの？」

しかしその間に答えたのはたった一人海水帽をかぶった、背の高いHだった。

「海蛇か？　海蛇はほんとうにこの海にもいるさ。」

「今頃もか？」

「何、滅多めったにやいないんだ。」

僕等は四人とも笑い出した。そこへ向うからながらみ取りが二人、（ながらみと言うのは螺にじの一種である。）魚籃びくをぶら下さげて歩いて来た。彼等は二人とも赤禪あかふんどしをしめた、筋骨きんこつの逞たくましい男だった。が、潮しおに濡れ光った姿はもの哀れと言うよりも見すばらしかった。Nさんは彼等とすれ違う時、ちよつと彼等の挨拶あいさつに答え、「風呂ふろにお出いで」と声を

かけたりした。

「ああ言う商売もやり切れないな。」

僕は何か僕自身もながらみ取りになり兼ねない気がした。

「ええ、全くやり切れませんよ。何しろ沖へ泳いで行っちゃ、何度も海の底へ潜るんですからね。」

「おまけに濡に流されたら、十中八九は助からないんだよ。」

Hは弓の折れの杖を振り振り、いろいろ濡の話をした。大きい濡は渚から一里半も沖へついている、——そんなことも話にまじっていた。

「そら、Hさん、ありやいつでしたかね、ながらみ取りの幽霊が出るって言ったのは？」

「去年——いや、おとしの秋だ。」

「ほんとうに出たの？」

HさんはMに答える前にもう笑い声を洩らしていた。

「幽霊じゃなかったんです。しかし幽霊が出るって言ったのは磯つ臭い山のかげの卵塔場でしたし、おまけにそのまたながらみ取りの死骸は蝦だらけになって上ったもんですから、誰でも始めのうちは真に受けなかつたにしろ、気味悪がっていたことだけは確かな

んです。そのうちに海軍の兵曹上りの男が宵のうちから卵塔場に張りこんでいて、とうとう幽霊を見とけたんですがね。とつつかまえて見りや何のことはない。ただそのながらみ取りと夫婦約束をしていたこの町の達磨茶屋の女だったんです。それでも一時は火が燃えるの人を呼ぶ声が聞えるのつて、ずいぶん大騒ぎをしたもんですよ。」

「じゃ別段その女は人を嚇かす気で来ていたんじゃないの？」

「ええ、ただ毎晩十二時前後にながらみ取りの墓の前へ来ちゃ、ぼんやり立っていただけなんです。」

Nさんの話はこう言う海辺にいかにもふさわしい喜劇だった。が、誰も笑うものはなかった。のみならず皆なぜともなしに黙って足ばかり運んでいた。

「さあこの辺から引つ返すかな。」

僕等はMのこう言った時、いつのまにかもう風の落ちた、人気のない渚を歩いていった。あたりは広い砂の上にまだ千鳥の足跡さえかすかすに見えるほど明るかった。しかし海だけは見渡す限り、はるかに弧を描いた浪打ち際に一すじの水沫を残したまま、一面に黒ぐろと暮れかかっていた。

「じゃ失敬。」



「さようなら。」

HやNさんに別れた後、<sup>のち</sup>僕等は格別急ぎもせず、冷びえした渚を引き返した。渚には打ち寄せる浪の音のほかに時々澄み渡った<sup>ひぐらし</sup>鯛の声も僕等の耳へ伝わって来た。それは少くとも三町は離れた松林に鳴いている鯛だった。

「おい、M！」

僕はいつかMより五六歩あとに歩いていた。

「何だ？」

「僕等ももう東京へ引き上げようか？」

「うん、引き上げるのも悪くはないな。」

それからMは気軽そうにティツペラリーの口笛を吹きはじめた。

(大正十四年八月七日)



# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第三卷」筑摩書房

1971（昭和46）年

初出：「中央公論」

1925（大正14）年9月

入力：j.ujiyama

校正：大野晋

1999年1月7日公開

2014年8月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 海のほとり

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>